

社会調査の妥当性

野 田 一 雄

(1970年12月 受付)

Validity of Social Surveys

Kazuo Noda

In this paper, we study validity of social surveys. In general, validity of a social survey is inspected by observing that probability distribution of responses obtained through question items have characteristics reflected precisely in the object of the survey.

We find practical methods which can discriminate whether question items are valid or not, using data obtained from the enforced sample survey (too see [2]) in the following procedure. At first we select three question items from the another sample survey (to see [1].) and call them main questions.

Next we set up groups of subquestions for the purpose of inspecting validity of the main questions, namely we make combinations of the subquestions in the groups and call them patterns.

We assume that there are several latent classes in attitudes of individuals which correspond to responses obtained through the patterns. Then we can expect to observe probability distributions of the latent classes.

Our method verifying of the survey lies in constitution of simultaneous distributions of responses of the main questions and ones of patterns, namely latent classes. Here we can observe correlations between the groups of responses in the main questions and the ones in the patterns, and expect to test such validity by similarity or disparity which depends on the correlations.

As the main questions concern with social attitude toward life, custom, children and so on, the groups of subquestions are constituted chiefly with three measurements, related with attitude toward social norm, environment and education.

Thus we succeed in finding measurements which can discriminate validity of the main questions. A weak point of our analysis lies in reliability of the patterns in the following sense. In our panel survey, the marginal distributions of the patterns remain about the same on the second observation as on the first, but a large proportion of individuals in each pattern gives different responses on the two occasions.

The Institute of Statistical Mathematics

はじめに

こゝに提起するものは、1967年から実施された「態度の構造分析に関する統計的研究」(『数研レポート 22』参照)の諸分析結果のうちの一考察である。統計数理研究所第2部第1研究室を中心として、この間数多くの社会調査が実施されてきたなかで、調査質問作成に際し、その主旨が調査の実施過程のうちに損われることなく初期の目的を達成するために、如何なる注意と工夫を考慮しなければならないか、またそのような問題点を発見するために如何なる方法を探究すればよいかということが常時問題意識として討議されてきたのであるが、上記調査はそのような目的のためにいくつかの実験を試行したものである。

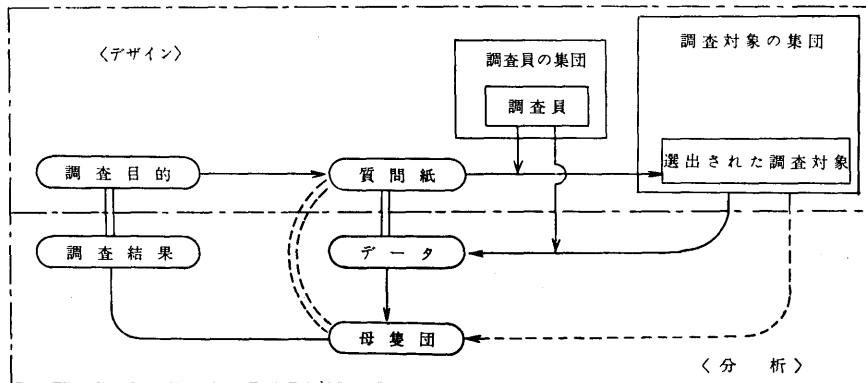
こゝでは、調査の妥当性ということの検討に目標を限定し、上記調査にとられた分析方法とその結果を報告することにしよう。

§1. モデルの設定

社会調査、こゝでは世論調査に限定してよいが、これらの調査を企画する際、その妥当性

(validity) が保障されているかどうかということは常に注意を要する問題点である。調査の結果、取得されたデータが実際に本来の調査目的に適応した特性を具現しているかどうかということは調査実施上の根本的な要素にかかわるものである。統計的な観点でいえば、調査対象の集団から構成される調査事項（標識）の母集団が構造として本来の調査意図を正確に反映させたものになっているかどうかということである。

調査実施の過程にわたる機構は概略的には下図のような図式となるであろう。



もちろん、調査の実施過程において、サンプリング・システムから由来する偏りや調査員による歪みなどがデータの分布の偏りとして影響を与えることになるであろうが、それらはあくまで形成される分布に歪みを与えるものとして捉え、調査の妥当性は媒介手段としての質問紙を通して構成される質問群に規定された標識の母集団が本来の調査目的を反映したものになっているかどうかをたずねるものであろう。例えば世論調査では調査対象の集団の真の意見分布になっているかどうか問われることになる。

1967年実施の「態度の構造分析に関する統計的研究」（『数研研究レポート』）に部分的に収録）なる調査の主要な目的は、このような母集団構成の在り方を研究することによって、調査の妥当性を吟味する立脚点と方法の確立を探索することであった。

其処でとられた方法は、まずモデルとしては、ある調査目標を設定し、それを質問紙を媒介として調査対象に作用させるとき、その対応に際して一定の「態度」なる反応の機構が対象の個々の内に生成され、この機構を通して回答なる反応がなされるということ、およびそれらは類似の度合に応じて幾つかのパターンに分類され得るという仮定を置いた。

かくして、分析の対象となる質問を「国民性の研究」調査から三つだけ選出し、これに若干の副質問を付加して主要質問群と名づけた。これらの意義および選定の理由は後に述べる。

次ぎに分析の手段となる副質問群の設定についてであるが、これらは4種類にわたって構成された。第1のものはいわゆる社会規範に関する質問の群で、それらの組合せによって幾つかのパターンが作成され、それぞれがサンプルの意識の強度を測るようになっていて、「ノルム質問群」と名づけられた。第2のものは帰属意識を見ようとするもので「リファレンス・グループ質問群」と名づけられた。第3のものは、質問紙の形式について幾つかのトリックを忍び込ませ、それに対する反応の度合を見ようとするもので、「テクニカル質問群」と名づけられた。最後のものは、特に主要質問の間8に関連して設定されたもので、調査対象の教育関係についての関心の度合を見ようとするものである。

これら副質問群設定の目的は次ぎの様なものであった。前述の仮定から出発しているわけであるが、それぞれの群の中でいくつかの質問の組を作り、それらによって得られる標識の組合せ（これを我々はパターンと名づけよう）に対応して母集団を部類に類別する。勿論、調査対象の反応自体は確率的なあらわれ方を示すから、これらの部類はいくつかのパターンによって

相互補完するようになっていなければならないであろう。(あるいはパネル調査を行なって、各パターンの信頼性が安定しているかどうかをチェックするという方法も考えられる。)このようにしてチェックされた部類は層と見なすこともできよう。

次にこれらの部類の上で、主要質問に関する標識の分布を観てゆく。選ばれた主要質問は何れも社会規範にかゝるものであるから、質問設定の目的がそのようなものであれば、同様に社会規範に関して作られた我々の各部類においては、標識の分布は各部類に対応した相似性ないしは相反性を示すであろうと考えられる。もしも反対の結果が示されるならば、主要質問自体が前述の意味で妥当性を欠いていると判断されることになる。「テクニカル質問群」と「リファレンス・グループ質問群」などについては、別の観点から主要質問の妥当性を調べようとするものであるが、方法的にはまったく同様である。

以上が「態度の構造分析に関する統計的研究」において、妥当性検証についての主要なモデル設定と方法である。抽象的に論述するよりも、設定された質問群に即して、上述の方法を説明していく方が実践的であると考えられるから、次節以下、主要質問群、各副質問群、各パターンについての説明およびそれらに関する分析より得られた結果について観てゆくことにしよう。

なお、調査の概況と調査票およびその質問と集計表の見方について簡単に触れておく。

調査票は2種類に分けられ(これを「白調査票」、「黄調査票」と名づける)これを下記の地点にふりわけて、東京 23 区の有権者に対し、標本による面接調査を行なった。

(A) 白調査票 40 地点 × 8 サンプル = 320 サンプル

(B) 黄調査票 40 地点 × 8 サンプル = 320 サンプル

回収できたサンプルで分析のために使用されたものは「白」229 箇、「黄」213 箇である。

サンプル数がこのように限定されているため、以下みられるような詳細な分析について、サンプリング誤差の影響を免れるわけにはいかないであろう。しかし、方法論の確立のため部類間の傾向を調べるという意味では、十分な役割を果たしていると考えられる。

白調査票と黄調査票との二つを構成したのは、同じ主旨の質問を、その文章のある部分やあるいは選択肢を変化させて、それらの影響を調べるためであった。

また、白調査票はパネル調査として使われ、前期および後期の調査結査を得ている。パネル調査の目的は質問や作成されたパターンの安定度をみるためであった。

次節以下にあげられた各質問はこれら白調査票、黄調査票の区別を「白」、「黄」であらわすことにする。また「前期」、「後期」とあるのは、パネル調査の両対を示すものである。

全体を通して、表に使用されている記号 x, y, w はそれぞれ選択肢の「その他(の回答)」, 「D. K. (無答)」, および調査員によるサンプル回答の記入もれを意味する。

§2. 主要質問群について

主要質問は考察の対象となるものであるから、質問文の内容と調査結果(単純集計)をあげておく。

表 2.1 めんどうをみる課長.(白)

(白) 問 6 a) [リスト] ある会社につきのような甲、乙 2 人の課長がいます。もしあなたが使われるとしたら、どちらの課長につかわれる方がよいと思いますか、どちらか一つあげて下さい?

- 1 甲課長 規則をまげてまで、無理な仕事をさせることはありませんが、仕事以外のことは、人のめんどうを見ません。
- 2 乙課長 時には規則をまげて、無理な仕事をさせることもありますが、仕事以外でも、人のめんどうをよく見ます。

b) [同リスト] それでは、あなたは、この表の中の甲の課長として、どんな人

を思いうかべましたか、

思いついたままの感じをおっしゃってください？

c) [同リスト] では、乙の課長として、どんな人を思いうかべましたか？

(白) a)	1 甲課長	2 乙課長	3 その他	4 D.K.	計
前期調査	14	84	1	1	100 (%)
後期調査	13	81	2	4	100 (%)

表 2.2 めんどうをみる課長 (黄)

(黄) 問 6 a) [リスト] ある会社につきのような甲、乙2人の課長がいます。もしあなたが使われるとしたら、どちらの課長につかわれる方がよいと思いますか、どちらか一つあげて下さい？

- | | |
|-------|--|
| 1 甲課長 | 仕事以外のことで、人のめんどうを見ませんが、規則をまげてまで、無理な仕事をさせることはありません。 |
| 2 乙課長 | 仕事以外のことで、人のめんどうをよく見ますが、時には規則をまげて、無理な仕事をさせることもあります。 |

b) (白と同じ)

c) (白と同じ)

(黄) a)	1 甲課長	2 乙課長	3 その他	4 D.K.	空欄	計
前期調査	40	56	2	1	1	100 (%)

表 2.3 恩人がキトクするとき (白)

(白) 門 7 a) [リスト] 南山さんは、小さいとき両親に死に別れ、となりの親切な西木野さんに育てられて、大学まで卒業させてもらいました。
そして南山さんはある会社の社長にまで出世しました。
ある日故郷の西木野さんがキトクになり
「ニシキノ キトク スグ カエレ」
という電報が、南山さんにきました。

ところが、丁度その時、南山さんの会社では大事な会議が開かれることになっています。その会議では、南山さんの会社がつぶれるかつぶれないかがきまることになっていました。

このとき、南山さんが、つぎのどの態度をとれば、あなたの気持ちにビックリしますか？

- | | |
|-------------------|--------|
| 1 すぐ故郷へ帰ることにした | |
| 2 大事な会議に出席することにした | |
| 3 その他〔記入〕 | 4 D.K. |

b) [つぎのリスト] このとき南山さんは、会議に出席しないで故郷へ帰ったとします。

その場合、あなたは南山さんをどう思いますか？

- 1 恩知らず，義理人情なしといわれたくない
- 2 恩返し，義理人情をはたせばいつか会社もよくなる
- 3 大事なときに帰るのは，社長として失格
- 4 利害を考えない非合理的なやり方
- 5 恩返し，義理人情で当然
- 6 人道上からみて当然
- 7 その他〔記入〕

8 D. K.

c) [つぎのリスト] それでは逆に，故郷に帰らないで会議に出たとしたらどうですか？

- 1 利害を考えた合理的なやり方
- 2 社長として当然
- 3 公私混同，無責任といわれたくない
- 4 その他〔記入〕

5 D. K.

(白) a)	1 故郷	2 会議	3 その他	4 D.K.	計
前期調査	27	69	2	2	100 (%)
後期調査	27	62	6	5	100 (%)

(白) b)	1 恩知らず	2 恩返し	3 社長として失格	4 非合理的	5 義理人情	6 人道上	7 その他	8 D.K.	計
前期	5	16	38	3	11	20	4	3	100 (%)
後期	2	13	40	2	17	21	2	3	100 (%)

(白) c)	1 合理的	2 社長として当然	3 公私混同	4 その他	5 D.K.	計
前期調査	15	59	17	6	3	100 (%)
パネル調査	12	64	10	7	7	100 (%)

表 2.4 先生の悪事

(黄) 問 8 a) [リスト] 「先生が何か悪いことをした」というような話を，子供がきいてきて，親にたずねたとき，親はそれがほんとうであることを知っている場合，子供には

「そんなことはない」

といった方がいいと思いますか。それとも

「それはほんとうだ」

といった方がいいと思いますか？

- 1 「そんなことはない」という
- 2 「ほんとうだ」という
- 3 その他〔記入〕

4 D. K.

b) [a) と同じリスト] それでは，子供の教育のことを考えたとき，子供には，どのようにいった方がいいと思いますか？

- 1 「そんなことはない」という
- 2 「ほんとうだ」という
- 3 その他〔記入〕

4 D. K.

c) [a) と同じリスト] では学校の先生全体の 立場を考えたとき、子供には、どのようにいうのがよいですか？

- 1 「そんなことはない」という
2 「ほんとうだ」という
3 その他〔記入〕

4D. K.

(黄) a)	1 そんなことはない	2 ほんとうだ	3 その他	4 D.K.	計
前期調査	47	42	9	1	100 (%)

(黄) b)	1 そんなことはない	2 ほんとうだ	3 その他	4 D.K.	計
前期調査	40	41	14	5	100 (%)

(黄) c)	1 そんなことはない	2 ほんとうだ	3 その他	4 D.K.	5 空欄	計
前期調査	43	35	12	9	1	100 (%)

以上の質問のうち、問 6, a), 問 7, b) および問 8, a) がわれわれの素材として分析対象に選ばれた主要質問であり、各質問の b), c) はこれに付加された副質問である。

社会調査から素材を選ぶということゝ、過去実施された調査を通して性格がある程度判明しているものが望ましいという二つの理由から、「国民性調査」に使用された質問が選定されることになった。『日本人の国民性』（統計数研究所，至誠堂出版，1961）および『第2日本人の国民性』（同上，1970）において、それらの設定目的は次のように述べられている。

問 6, a), 問 7, a) は「身近な社会」について調べようとするものの中に位置づけられ、次のように述べられている。

「こゝでは主として人間関係における考え方、人倫関係といわれるものにたいする考え方、とくに日本的といわれる道徳の考え方、いわゆる義理人情に対する態度といったものを中心として、これを明らかにするために身近な社会のできごとにかんする問題提示の形で質問をつくり、回答を求めることにした。この節でとりあげるようなことは、主として外国人が日本のとしてとくにあげ、また戦前では美徳とされ、戦後では古い束縛、非合理、浪花節的といってむしろ悪徳とされていることがらであろう。こゝでとりあげた事象は一応だれでも体験し、考えたことのある身近な人間関係にかんするものであるから、質問の条件設定にむづかしさがあるが、回答としては、身がはいりやすいものである。」（『日本人の国民性』）

問 6 a) 「身近な社会：上役に対する考え：

これは人情的というか親分的というか、そうしたタイプのものを好むか、近代的なタイプを好むかを調べようとしたものである。」（『第2日本人の国民性』）

問 7 の 1 「身近な社会：思かえし：

恩人への情と現実の責務といった2つの競合する状況のもとで、どちらに重みをかけて行動をするかという、いわゆる競合規範 (conflicting norm) のあいだでの関係をみようとしたものである。」（『日本人の国民性』）

次に、問 8, a) は「子供」に対する態度を調べようとするものに位置づけられて、『日本人の国民性』では次のように述べられている。

「日本人の子供に対する態度については、いろいろと外国人から問題にされている。とくに一部の人類学者は、日本人の行動を子供時代のしつけ方に結びつけようとさえしている。とこ

ろで、その子供にたいするしつけ方において、実情を完全につかんでいるか否かにも問題がある。しかし、われわれの調査では、そのようなしつけの現実というものをそのまま把握することはできないが、意識を通してこれらの問題を分析しようと試みた。」

問 8 a) 「子供：ウソについて：

「先生の悪事」というのは、それが本当でも教育上、子供にはそんなことはないと否定するかどうか、いわば善意のウソとかウソも方便ということを認めるかどうかを問題にしたものである。

さて、以上が「質問のねらい」というべきものであるが、この間の調査結果から質問自体に孕まれている種々の問題が検討されるに至った。その内容については『第2・日本人と国民性』に詳述してあるから省略することとして、まずわれわれの調査から、どのような結果が出てきたかを観ていくことにしよう。

問 6 「めんどろをみる課長」では白調査票にあげられたもの（表 2・1）が「国民性調査」からとられた。黄調査票（表 2.2）では、リストの文章の前半と後半との部分がひっくり返されている。調査結果からは、これに対応して分布が変化していることがわかる。つまりこの実験から少くともいえることは、調査対象の質問文から受けとるイメージが、平均的にいえば、白調査票によるものと黄調査票とのそれとは相異しているということであろう。これはまた特にこのような質問形式では、質問体成の意図が生かされているかどうかをみるために、事前の吟味調査を要することを示しているといえよう。

次に、b), c) で「甲課長」「乙課長」のイメージを自由質問の形式でとられているが、これらのクロス集計の結果は次の通りである。

表 2.5 (白) I. 問 6 a) で「甲課長」をあげた場合

タイプ	b) 甲のイメージ	c) 乙のイメージ	計
1	現代的	人情深い	4
2	真似面	温かい人	3
3	職務に忠実	融通がきく	2
4	あまりとやかくいわない人	左記の反対	4
5	普通（平凡）	出世主義	5
6	特別の例をあげて表現		1
y	b), c) の何れかがD.K.		11
計			30

II. 問 6, a) で「乙課長」をあげた場合

タイプ	b) 甲のイメージ	c) 乙のイメージ	計
1	合理的 役人タイプ	人情深い 親分肌	3 } 9
2	冷たい 融通がきかない	人間味あり 思いやりがある	50 } 61
3	自分本位	めんどろみがよい	25
4	仕事だけ夢中 無責任	仕事熱心でおもいやりがある 責任感あり	13 } 22
5	がんこもの	まあまあの感じ	5
6	特別の例をあげて表現		2
7	上記以外のものをあげる		8
y	b), c) の何れかがD.K.		27
x	その他		21
計			180

次に問 7 「恩人がキトクするとき」について、a) の二つの選択肢は情況の両極を表わしている。黄調査票では、リストの文章を次のように更に強調させてみた。

表 2,6 (黄) 問 7 a)

〔リスト〕

- | | |
|--|---------|
| 1 たとえ、会社がつぶれても、故郷へ帰る
2 たとえ、恩人の死に目に会えなくても、その会議に出席する
3 その他(記入) | 4 D. K. |
|--|---------|

(黄)a)	1 故郷へ 帰る	2 会議に 出席する	3 その他	4 D.K.	計
前期調査	28	64	4	4	100 (%)

この結果は白調査票(表 2・3)の場合とほとんど変わらない。ということは、白調査票の質問文の内容が既にこのような極限情況をつくりだしていると解釈されよう。

質問 b) では a) における選択の根拠を問うものであり、c) では b) の逆の立場に立たせ、しかもその内容から『義理人情』に関する要素を除いたものになっている。

質問 a), b), c) をクロス集計したものの結果は通ぎのとおりである、

表 2,1 (白) 問 7 におけるパターン

パターン	選 択 肢 の 組 合 せ			計	
	a)	b)	c)		
1	1	1,2,5	x, y	7	67
2	1	1,2,5	1	13	
3	1	1,2,5	2,3	18	
4	1	6	1,2,3	29	
5	1	3,4	—	0	
6	2	1,2,5	—	34	155
7	2	6	1,2,3	23	
8	2	3,4	1	4	
9	2	3,4	2,3	89	
10	2	3,4	x, y	5	
x	何れかが x			12	21
y	何れかが y			9	
計				243	

これらのパターンのうち、典型的に動いたのは 1, 2, 3 および 8, 9, 10 であろう。4, 5 および 6, 7 は屈折を示すものであると考えられる。a) では選択肢 1 を選んだ群は選択肢 2 を選んだ方よりも複雑な動き方を示している傾向がありそうだが、これだけでは断定はできない。

最後に問 8 「先生の悪事」について観よう。問 8 も質問の形式としては問 7 と同様であるが、その内容が問 7 の場合のように明確でないというところに特徴がある。したがって、調査対象のこの質問から受けるイメージが確定しないのではないかということが予想されるわけである。

実際、この質問では、選択肢「その他」を選んだものが 9% であり比較的に大きくなっている(問 6, 問 7 ではそれぞれ 1%, 2%)。更に、質問 b), c) でバイアスをかけた質問を追求すると、それに対応した動きと、また「その他」を選択するものが大きくなる傾向を示している。また質問の信頼性ということにおいても、次ぎのように白調査票のパネル調査を見る限りでは安定しているとはいえないであろう。

表 2.8 (白) 問 8 a)

	1 そんなことは ない	2 それはほ んとうだ	3 その他	4 D.K.	計
前期調査	42	50	7	1	100 (%)
後期調査	43	43	11	3	100 (%)

b)

	1 そんなことは ない	2 それはほ んとうだ	3 その他	4 D.K.	計
前期調査	33	47	13	7	100 (%)
後期調査	37	39	14	10	100 (%)

c)

	1 そんなことは ない	2 それはほ んとうだ	3 その他	4 D.K.	空 欄	計
前期調査	34	39	15	11	1	100 (%)
後期調査	41	38	9	11	1	100 (%)

さて、これら、質問 a), b), c) についてクロス集計した結果は次のとおりである。

表 2.9 (黄) 問 8 におけるパターン

パターン		選 択 肢 の 組 合 せ			計
		a)	b)	c)	
1	1	2	2	2	65
2～5	2	2 2	2 2	1 x, y	26
	3	2 2	x, y 1	2 2	13
	4	2 2	x y	x, y y	11
	5	2 2	1 x, y	1 1	8
6～10	6	1	x, y	—	14
	7	1	1	2	7
	8	1	2	1 以外	12
	9	1	2	1	14
	10	1	1	x, y	10
11	11	1	1	1	45
	x	x	—	—	16
	y	y	—	—	2
	計				243

バイアス質問 b), c) 対して回答が変動しないのはパターン 1, 11 であって全体の 45%, 変動したものはパターン 2～10 で全体の 46% となって、大体変動したものとししないものの比は半々になっている。

この結果は、先述のように問 8 の質問内容が、情況設定に十分性を欠いていることを示していると考えられよう。

さて、問 7 a), 問 8 の 1 は内容については社会規範に関するものであるが、また形式においても「競合の場における選択という形」になっている。たゞ各々を比較すると、条件設定が前者においてはより具体的になっており、後者は稀薄である。しかも、この「競合」のベクトル

が同一次元においてとらえられるという具合には必ずしもならないということである。例えば問 8 a) についていえば、『第2日本人の国民性』では次のように述べられている。

「しかし、この質問が問題にするところの教育上の配慮というものは、先生のした悪いことの内容がどのようなものであるか、あるいは相手である子供の年令、およびそれに応じた理解の仕方、あるいは子供と先生の関係、子供の関連等、さまざまなことによって同じ教育上の配慮といっても異った面が重視されることになるので、時の流れとして『子供には、それがほんとうだという』という意見が多数になってきたとはいってもその内容は複雑であり、『場合による』という意見が他の質問にくらべて多いのも特徴的である。」

このような情況設定上の問題点はわれわれの調査結果からも既に観てきたのであった。問 7 a) の 1, 問 8 の 1 はかゝる「競合」の形式において社会規範に関する内容を問題とするととき、外的条件の設定、したがってそれに規定される情況設定が、調査の目標に合致してなされているかどうかが問われてくる。勿論、このような「競合」の形式が「国民性」の調査に妥当なものであるかどうかは、一つの問題として論じられなければならない。われわれは、問 7 a), 問 8, a) の「質問のねらい」が調査結果に反映されているかどうかを次節で述べる副質問群によって観察しようと考えた。

次に問 6 a) について考察しよう。「人情的」な課長か、「近代的」な課長を選ぶかということが質問の主旨であるわけだが（かゝる意味ではこの質問も「競合」の形式になっている）、実際は質問のリストの文章から、調査対象が各自イメージ・アップすることによって、回答を与えるようになっている。この形式から生じた問題としては、白調査票、黄調査票の結果によって既に考えてきた。内容上の問題としては、職場における人間関係、情況およびその帰属意識などが関係してくるであろう。またそうでなければ最初の質問の主旨は実現されなかったことになるからである。

さて、以上のような観点から §1 で述べたような分析のための副質問群を設定し、3 つの主要質問がこれらにどのように関係するかを観ようとした。まず副質問群をどのように設定したかを述べる。

§3 副質問群について

3.1 テクニカル質問群

いくつかの質問をまとめて、選択肢の組をつくり、これに対応する回答の集まりを部類とする。このような組をパターンと呼ぶことにしよう。いま 1 つの例を示す。

T₁: 問 1 × 2 × 3

問 1 [リスト] 何人かで集まって、なにか相談をしているとき、あなたは、

「スジを通すこと」に重点をおく人と

「まるくおさめること」に重点をおく人と

どちらの人の方が感じがよいと思いますか。

この表の中から、どちらか 1 つをえらんでください？

- | |
|----------------------|
| 1 「スジを通すこと」に重点をおく人 |
| 2 「まるくおさめること」に重点をおく人 |
| 3 その他(記入) |

4 D. K.

問 2 [リスト] それでは、このような相談事の場合、どうするかを手をあげてきめることになりました。あなたは、このようなときどうしますか？

- | |
|-------------------|
| 1 すぐ手をあげる |
| 2 まわりの人があげたら手をあげる |
| 3 ようすをみる |
| 4 その他(記入) |

5 D. K.

問 3〔リスト〕ある町の小学校では、設備をよくするため、毎年寄付をあつめるのがふつうになっています。

こんどは講堂を改築することになり、P・T・A から寄付あつめにやってきました。ところが東（ヒガシ）さんは寄付をことわり

『そのようなお金は当然町か国が出すべきで、自分たちにおわせるべきではない』と、いいとおしました。

あなたは、東さんの態度をどう思いますか？

- 1 がんこものの態度だと思う
- 2 自分本位の態度だと思う
- 3 理屈っぽい態度だと思う
- 4 あっばれな態度だと思う
- 5 その他〔記入〕

6 D.K.

問 1、問 2、において外的条件の内容が不十分であって情況の説明がなされていない。また問 3 では、選択肢の設定に偏りがあることが歴然としている。したがって調査対象は多く、これらの質問に抵抗を感じるであろうと予想されるのであるが、調査結果では次ぎのようなものになった。

表 3.1 (白) 問 1 スジを通すか、まるくおさめるか。

	1 スジを通す	2 まるくおさめる	3 その他	4 D.K.	計
前期調査	43	51	6	0	100 (%)
後期調査	39	51	8	2	100 (%)

(白) 問 2 手をあげる。

	1 すぐてをあげる	2 まわりの人が手をあげたら	3 ようすをみる	4 その他	5 D.K.	計
前期調査	55	8	30	6	1	100 (%)
後期調査	56	5	30	6	3	100 (%)

(白) 問 3 P.T.A の寄付集め

	1 がんこもの	2 自分本位	3 理屈っぽい	4 あっばれ	5 その他	6 D.K.	計
前期	9	30	17	33	9	2	100 (%)
後期	8	33	14	30	8	7	100 (%)

これらの表から観られるとおり、質問に抵抗を明確に示したもの——「その他」の回答者は、他の質問に比べ相対的には多いとしても、これらの数字はわれわれ調査企画者の予想を下回るものであった。つまり、調査対象はこの程度の不均衡の質問でも、ほとんどが何らの形で回答するということである。この事実、社会調査をこのような質問紙の形式で実施する場合、ある意味では不可避の問題点を投げかけているわけであって、社会調査の一定の限界性を示しているといえよう。いずれにせよ、社会調査における質問紙について、安易な処理を許してはならないという一つの警告を与えていると考えられる。

三つの質問からのタイプ分け—パターン分類は次ぎのとおりである。

表 3.2 T_1 : 問 $1 \times 2 \times 3$ (白)

パターン		問 1	問 2	問 3	
t (典型的)	1	—	1	1, 4	49
	2	—	1	2, 3, x_x, x_7, y	56
m (中間)	3	—	2	1, 2, 3, 4, x_x, x_7, y	18
	4	—	x_x, y	1, 2, 3, 4	3
	5	—	3	1, 2, 3, x_x, x_7, y	41
x (抵抗を示す)	6	—	3	4	17
	7	$x_1 \sim x_6$ の何れかがあるもの			30
y		すべて x_x, y, x_7			1
計					215

ここで $x_1 \sim x_6$ は質問を批判したり、「場合による」、「考えられない」などこの質問に抵抗を示したものである。パターン分類で t の部分はいわばステレオタイプの反応したものであり、 x は批判的なもしくは論理的な部分、 m はその中間的部分であるといえよう。

さて、以上のパターン分類を T_1 と名づける。質問内容は異なるが（「家の立ちのき」）、それと同じようなトリックを使って別のもう一組を作って T_1' と名づけた。

T_1' : 26 a)~j)

問 26 [リスト] 上の段にいろいろの項目があります。

- まず、「赤い羽根共同募金」について、あなたは進んで寄付する方だとお考えですか。それとも、皆が出せばつき合って出すぐらいですか？（下の段のどれにあたりますか）
- では緑の羽根募金はどうですか？
- では「P・T・A の寄付」はどうですか？
- 「お祭りの寄付」はどうですか？
- 「町内会の寄付」はどうですか？
- 「日赤（日本赤十字社）の寄付」はどうですか？
- 「台風災害地に対する募金」はどうですか？
- 「原水爆禁止大会の募金」はどうですか？
- 「インド救済の募金」はどうですか？
- 「敬老会の寄付」はどうですか？

	1 進んで寄付する	2 皆が出せば寄付する	3 あまり寄付したくない	4 寄付をとりきたらはつきりことわる	5 その他（記入）	6 D.K.
a 赤い羽根	1	2	3	4	5	6
b 緑の羽根	1	2	3	4	5	6
c P.T.A の寄付	1	2	3	4	5	6
d お祭りの寄付	1	2	3	4	5	6
e 町内会の寄付	1	2	3	4	5	6
f 日赤の寄付	1	2	3	4	5	6
g 台風災害募金	1	2	3	4	5	6
h 原水爆募金	1	2	3	4	5	6
i インド救済募金	1	2	3	4	5	6
j 敬老会寄付	1	2	3	4	5	6

表 3.3 T_2' 問 26 a)~j) (白)

パターン	問26 a) ~ j)	
m (中 問)	1	下記以外のもの
b (偏った 傾向)	2	2,3 のみ (例外は 2 個以内)
	3	3,4 のみ (")
	4	1,2 のみ (")
	5	1,4 のみ (")
r (連続す る傾向)	6	8 個以上 1 のみ もしくは 2 のみ
	7	" 3 のみ もしくは 4 のみ
	$xory$	" x のみ もしくは y のみ
計		215

このパターン分類では、同型の質問を繰り返し行なうことによって、調査対象の反応の傾向を観ようとするものである。パターン b では、ある種のかたよりが考えられ、 r では特定の項目のみに反応する傾向、 m はそのような特別の傾向を示さないものというようにみなそうとした。

質問内容が異なるが(「関心があるか」)、同型のパターン分類をもう一つ作って、これを T_2 と名づけた。

以上の他にもいくつかのパターン分類を作成したのであるが、ここでは T_1 、 T_1' 、 T_2 、 T_2' を分析の手段として考えてゆくことにする。

3.2 ノルム質問群

この質問群は社会規範や通念に対する意識の強度をみようとするもので、いわゆる「模範回答」とみられる選択肢の集中状態をはかって、どの程度かかる規範に束縛されているかによってパターン分類する、まず、その一つを取りあげる。

N_1 : 問 $9 \times 10 \times 11 \times 12 \times 13a)$

ここでは例示のため、二つの質問についてのみそれらの内容をあげておく。

問 9 [リスト] 夜おそく、電車の中でよっぱらいが若い女性に悪ふざけをしていました。それをみかねた 1 人の青年がそのよっぱらいをたしなめたところ、逆にやぐられてケガをしてしまいました。あなたはこの青年のしたことをどう思いますか?

- 1 勇気のある立派な行ないだ
- 2 危いと思っただかかわらない方がよい
- 3 分別のない行ないだ
- 4 その他(記入)

5 D. K.

問 10 [リスト] 東さんは会社の上役から芝居の招待を受けましたが、どうも気がすみません。そこで風邪気味だからといって断りました。このことについて、あなたはどう思いますか?

- 1 うそをつくことはよくない。断わるにしても、本当のことをいうべきだ
- 2 本当のことをいうのは気まずいだろうからこの程度のうそなら、仕方がない
- 3 その他(記入)

4 D. K.

表 3.4 問 9 (白)「よっぱらいの悪ふざけ」

	1 勇気がある	2 かかわらない方がよい	3 分別がない	4 その他	5 D.K.	計
前期調査	85	9	3	2	1	100 (%)
後期調査	80	12	3	4	1	100 (%)

問 10 (白 「芝居の招待」)

	1 うそはよくない	2 この程度なら仕方がない	3 その他	4 D.K.	計
前期調査	29	69	2	0	100 (%)
後期調査	33	64	2	1	100 (%)

次ぎにこれらの質問を通して作ったパターン分類を示しておく。

表 3.5 N_4 問 $9 \times 10 \times 11 \times 12 \times 13a$ (白)

パターン			点 数	計
強	1		$5 \leq \leq 6$	52
	2		$6 < \leq 7$	45
	3		$7 < \leq 8$	29
	4		$8 < \leq 10$	7
弱	z		z が 1 個以上	44
	x'		x' "	7
x			x "	21
y			D.K. "	10
計				215

ここでは規範にかかわる選択肢に小さい点数を与え、各質問について合計したもので上のように分類した。パターン z は、例えば問 9 では選択肢 3 など、ノーマルでないと思われる選択肢に回答したものの部分である。 x は同じく、これらの質問に抵抗した部分、 x' は別の内容をあげた部分である。

次ぎにもう一組のパターン分類を例示しよう。

 N_4' 問 27

問 27 [見聞きのリスト] つぎの表の中にいくつかの項目があります。それぞれについて、あなたが「非常に気にかけていること」と「人なみ以上気にかけていること」、それから「あまり気にかけていないこと」をわけておっしゃってください？

	1	2	3	4	5
	非常に気にかけている	人なみ以上に気にかけている方だ	ふつう	あまり気にかけていない方だ	D.K.
公共の財産を大切にする	1	2	3	4	5
自分の楽しみを犠牲にしても困った人を助ける	1	2	3	4	5
親に孝行する	1	2	3	4	5
人のメンツを尊重する	1	2	3	4	5
人との契約(約束)を守る	1	2	3	4	5
恩返しをする	1	2	3	4	5
義理人情を尊ぶ	1	2	3	4	5
個人の権利を尊重する	1	2	3	4	5
文化や社会福祉に貢献する	1	2	3	4	5
自由を尊重する	1	2	3	4	5

表 3.6 問 27 (白) 「気にかけていること」
「人との契約(約束)を守る」

	1 非常に気 にかける	2 人なみに 気にかける	3 ふつう	4 気にかけて いない方	5 D.K	その他	空 欄	計
前期調査	48	28	23	0	1	0	0	100(%)
後期調査	51	31	16	0	1	0	1	100(%)

「義理人情を尊ぶ」

	1 非常に気 にかける	2 人並みに 気にかける	3 ふつう	4 気にかけて いない方	5 D.K.	その他	
前期調査	26	27	31	8	2	0	100 (%)
後期調査	19	25	50	4	1	0	100 (%)

ここでは二つの質問項目についてのみ調査結果を示し、他の項目については省略した。

これらの項目はいずれも社会規範に関するものであるが、公共的なものと私的なものとに分けて考えることができるであろう。前者を A 部分、後者を B 部分として「気にかける度合」の強さで点数づけを行ない次ぎのようなパターン分類をつくった。

表 3.7 N_4' (白)

パターン	A 部 分	B 部 分	
1 (気にする)	10< ≤16	10< ≤16	94
2 (私 的)	4≤ ≤10	10< ≤16	35
3 (公 的)	10< ≤16	4≤ ≤10	27
4 (気にしない)	4≤ ≤10	4≤ ≤10	37
x (そ の 他)	その他が 1 個以上		2
y (D. K.)	D. K. が 1 個以上		18
w	空欄が "		2
計			215

A 部 分	B 部 分	パターン分類に関係しないもの
人との契約(約束) 個人の権利 文化や社会福祉 自 由	親 孝 行 人のメンツ 恩 返 し 義理人情	公 共 財 産 楽しみを犠牲

かくしてパターン 1 は公的、私的共に「気にする」部分であり、4 では「気にしない」部分とみることが出来よう。2, 3 では前者が私的、後者が公的な方に重みを置いている部分である。

同様な形式で、社会規範に関して、慣習的なものと、迷信として考えられるものについて関心の度合を調べ、パターン分類を作成した。これを N_4 と名づける。

ノルム質問群では他にもパターン分類をつくったが、ここでは N_1, N_4 および N_4' について観てゆくことにしよう。

選 択 肢	配 点
1 非常に気にする	4
2 人並以上に気にする	3
3 ふつう	2
4 あまり気にしない	1

3.3 リファレンス質問群

職場に関する帰属意識や、人間関係、近代合理主義などについて意識の度合を調べ、これらによってパターン作成を考える。ここでは一つの例をあげておく。

R₂: 問 21

問 21 [リスト] これから新しい職場につこうというとき、あなたのもっとも望ましい職場のあり方として、つぎのうちのどれをいちばん重くみますか、今やっているお仕事とは関係なくっていただけませんか？

では、そのつぎにはどれを重くみます？

1	<input type="text"/>	仕事の出来具合に応じた収入の得られる職場
2	<input type="text"/>	失業のおそれのない職場
3	<input type="text"/>	家庭的な雰囲気のある職場
4	<input type="text"/>	自分の能力に応じて出世ができる職場
5	<input type="text"/>	めんどろな人間関係のない職場
6	<input type="text"/>	年月をかけてまじめに働けば出世してゆく職場
7	<input type="text"/>	その他(記入)
		8 D. K.

[あげた順に 1, 2 と 中に入れる]

表 3.8 問 21 (白) 「望ましい職場」

		1 収入	2 失業なし	3 家庭的	4 能力	5 人間関係	6 年月かけて	7 その他	8 D. K.	計
前期調査	1 位	16	12	14	30	12	13	0	3	100(%)
	2 位	24	15	14	10	12	14	0	4	100(%)
	計	20	13	14	24	12	14	0	3	100(%)

この質問にある選択肢は2つの傾向がある。選択肢 2, 3, 6 は旧来の考え方であろうし、選択肢 1, 4, 5 は近代的な考え方とみることができよう。これによって次ぎのようなパターン分類を作成した。

表 3.9 R₂: 問 21 (白)

パターン		1 位	2 位	
旧 ↑ ↓ 新	1	2,3,6	2,3,6	36
	2	2,3,6 x, y, w	x, y, w 2,3,6	0
	3	2,3,6 1,4,5	1,4,5 2,3,6	103
	4	x, y, w 1,4,5	1,4,5 x, y, w	0
	5	1,4,5	1,4,5	68
x		いずれもその他		1
y		" D. K.		7
計				215

パターン 1, 2, 3, 4, 5 の順位で古い考え方の強さを表わすものとする。この調査では、実際にはパターン 1, 3, 5 のみ反応があらわれている。1 は古い考え方、5 は新しい考え方、そして 3 は中位に位置するとみることができよう。

R₂' : 問 22 × 23 a) × 23 b)

問 22 [リスト] 仕事や勤め先を変えるということについて、いろいろな考え方があります。あなたのお考えは、つぎの意見のどちらに近いでしょうか？

- | | |
|------------------------------------|---------|
| 1 甲「より良い条件と能力を生かす仕事があれば、いつでも変わりたい」 | |
| 2 乙「たとえ、良い条件のところがあっても、一つの職場を守りぬく」 | |
| 3 その他〔記入〕 | 4 D. K. |

問 23 a) [リスト] つぎのような甲乙二つの職場があります。あなたはどちらの職場がより好ましいと思いますか？

- | | | |
|-----------|--|---------|
| 1 甲の職場 | 忙しいときには皆が手助けしてくれますが、こちらの都合のよいときに休むのは気がひけます。 | |
| 2 乙の職場 | 皆が手助けしてくれることもありませんが、自分の仕事をきちんとやっていたら、忙しいときにも気がねなく休めます。 | |
| 3 その他〔記入〕 | | 4 D. K. |

b) [つぎのリスト] それでは、つぎの場合ではどうですか？

- | | | |
|-----------|---|---------|
| 1 甲の職場 | 多少給料は少ないが、運動会とか旅行などをして家族的な雰囲気がある。 | |
| 2 乙の職場 | 人のつきあいよりも仕事だけの関係で結ばれていて、給料もそれに応じて定められる。 | |
| 3 その他〔記入〕 | | 4 D. K. |

表 3.10 問 22 (白) 「仕事の変更」

	1 甲	2 乙	3 その他	4 D.K.	計
前期調査	41	54	2	3	100 (%)
後期調査	36	57	2	5	100 (%)

問 23 a) (白) 二つの職場—手助け

	1 甲	2 乙	3 その他	4 D.K.	4 空欄	計
前期調査	28	68	1	3	0	100 (%)
後期調査	31	62	2	4	1	100 (%)

問 23 b) (白) 二つの職場—給料

	1 甲	2 乙	3 その他	4 D.K.	空欄	計
前期調査	67	31	1	1	0	100 (%)
後期調査	72	23	0	4	1	100 (%)

R₂ と同様に、新旧の考え方として点数づけを行なったのが次ぎのパターン分類である。この場合も 1～4 の順位で旧来の考え方の強さをあらわすこととして分類した。

表 3.11 R_2' : (白) 問 22 \times 23 a) \times 23 b)

パターン		選 択 肢			
		問 22	問 23a)	問 23b)	
旧 ↑	1	2	1	1	17
	2	2 (1)	2 (1)	1 2 (1)	96
↓ 新	3	2 1	2 2	2 1	67
	4	1 1	1 2	2 2	17
x		$x_1 \sim x_3$ が1個以上			4
y		x_4, x_5, y が1個以上			14
計					215

最後に R_2 と R_2' とを統合して次ぎのようなパターンを作成した.

表 3.10' $R: R_2' \times R_2$

パターン	
強	R_2' と R_2 とのパターン番号の和が2～5のもの
弱	R_2' と R_2 とのパターン番号の和が6～9のもの
その他	上のカテゴリー以外のもの

3.4 教育関係質問群

この質問群は、主要質問、問 8 a) に関して分析のために設定されたもので、子供の教育に対する関心の度合いについてのパターン分類となっている。すなわち、問 8 a) が調査対象に対し「教育上の配慮」を喚起させているとすれば、調査対象のもつ教育についての関心の強さに関係してくるであろうと予想されるわけであり、これについて相関を調べることが意味をもってくる。二つのパターン分類を例示する。

C_1 : 問 16 a) \times b) \times e) (黄)

問 16) a) 小学生や中学生が家庭教師についたり塾に通ったりして、課外の勉強をするのがふつうになっています。これは好ましい傾向だとお考えになりますか？
それは何故ですか？

- | | |
|------------|-----|
| 1 好ましい | 理 由 |
| 2 好ましくない | |
| 3 やむをえない | |
| 4 考えたことがない | |
- 5 D. K.

b) 小・中学校の「生徒の能力には本来、差があるから、能力別に学級を編成して授業するのがよい」という意見があります。

あなたはこの意見に賛成ですか、反対ですか？

- | | |
|------------|-----|
| 1 賛 | 成 対 |
| 2 反 | |
| 3 考えたことがない | |
| 4 その他(記入) | |
- 5 D. K.

- e) 先生の手におえない非行少年が出たとき、学校では転校や退学などの処置をすることが多いようです。人間を教育するという立場から考えたとき、このようなやり方はやむをえないことでしょうか、それとも、ほかの生徒に多少の迷惑がおよんでも、その学校であらゆる手をつくして、その少年を立ちなおらせるべきでしょうか？

- 1 やむをえない
2 立ちなおらせるべきだ
3 考えたことがない
4 その他(記入)

5 D.K.

表 3.12 (黄) 問 16 a)

	1 好ましい	2 好ましくない	3 やむをえない	4 考えたことがない	5 その他	6 D.K.	空欄	計
前期調査	19	50	23	4	1	2	1	100(%)

問 16 b)

	1 賛成	2 反対	3 考えたことがない	4 その他	5 D.K.	計
前期調査	32	60	4	2	2	100(%)

問 16 e)

	1 やむをえない	2 立ちなおらせるべき	3 考えたことがない	4 その他	5 D.K.	空欄	計
前期調査	22	62	3	10	2	1	100(%)

上の三つの質問でパターン分類をつくったのが次表である。この場合、点数が多いパターンは教育の関心が強いとみなされる。

表 3.13 C₁: 問 16 a) × b) × e) (黄)

パターン	点数	選択肢 (a) × b) × e))			
1	1	1 × 1 × 3, 3 × y × y,	1 × 3 × 1, 4 × 3 × 2,	1 × 1 × y, 1	6
	2	1 × 1 × 1, y × 1 × 2,	4 × 1 × 2, 3 × 1 × w,	1 × 3 × 2, 1 × 3 × x,	8
	3	1 × 1 × 2, 1 × 2 × 1, 1 × 1 × x,	4 × 2 × 2, 3 × 3 × 2, 4 × 2 × x,	3 × 1 × 1, y × 2 × x,	30
2	4	3 × 1 × 2, 1 × 2 × 2, 2 × y × 2, 1 × 2 × x,	2 × 1 × 1, 3 × 2 × 1, 3 × x × 1, 2 × 3 × x,	2 × 2 × 3, 2 × 2 × y, 3 × 1 × x,	46
3	5	3 × 2 × 2, 2 × x × 1,	2 × 1 × 2, 2 × 1 × x,	2 × 2 × 1, 3 × 2 × x,	63
4	6	2 × 2 × 2, x × 2 × 2,	2 × 2 × x, x × x × x,	x × 2 × x,	57
y		y × y × 3,	y × y × y,		2
w			空欄		1
計					213

C₂: 問 16 c)×d)

- c) 小学生の場合には、「先生はすべての点ですぐれた立派な人だ」と思わせておくことが教育上大切だとお考えになりますか？
- d) 中学生の場合にはどうですか？

	c) 小学生の場合	d) 中学生の場合
1 そう考える		
2 そうは考えない		
3 その他(記入)		
4 D. K		

表 3.14 問 16 c) 小学生の場合 (黄)

	1 そう考える	2 そうは考えない	3 その他	4 D.K.	空欄	計
前期調査	75	21	2	1	1	100 (%)

b) 中学生の場合 (黄)

	1 そう考える	2 そうは考えない	3 その他	4 D.K.	空欄	計
前期調査	43	48	6	2	1	100 (%)

この二つの質問は、主要質問、問 8a) について、調査対象が回答の選択をするとき、質問文に出てくる「子供」の情態（ここでは小学生と中学生との場合）が問題になってくるが、これに応じた考慮をとっているかどうかをみようとしたものである。次ぎのパターン分類はこれら

表 3.15 C₂: 問 16 c)×d) (黄)

パターン	選 択 肢		
	c)	d)	
1	1	1	89
2	2	1	56
3	2	2	40
<i>x</i>	その他を含むもの		17
<i>y</i>	D. K.を含むもの		8
<i>w</i>	空欄		1
計			211

二つの質問を 組み合わせたもので、パターン 1 は「先生はすべての点ですぐれた立派な人物だ」と思わせることに強く反応したもの、パターン 3 はその反対、パターン 2 は中間的部分と考えられる。なお選択肢 1×2 の組合せが考えられるが、この調査では 2 個の回答しかなく分析から除くことにした。

3.5 パターンの一致率

「白調査票」について、パネル調査の結果から計算された既述のパターン一致率を例示しておこう。ここでいうパターンの一致率とは、質問の回答それ自身の一致をみるのではなく、その揺れをパターンの間では許しながら、パターンとして一致した箇数をパターンを構成する回答のあるサンプルの全体数で除したものである。

結果は次表のとおりである。

表 3.16 T₁におけるパターンの一致率

パターン	一致率 (%)
<i>t</i> (典型的)	42
<i>m</i> (中 間)	71
<i>x</i> (抵抗を示す)	44
<i>y</i> (D.K.)	100
平 均	59

表 3.17 T₂におけるパターンの一致率

パターン	一致率 (%)
<i>m</i> (中 間)	67
<i>b</i> (偏った傾向)	38
<i>r</i> (連続する傾向)	38
平 均	57

表 3.18 N_1 におけるパターンの一致率

パターン	一致率 (%)
1 (強)	34
2 (中)	40
3,4 (弱)	27
その他	50
平均	33

表 3.19 N_4 におけるパターンの一致率

パターン	一致率 (%)
1 (気にする)	43
2 (迷信型)	33
3 (社会慣習型)	42
4 (気にしない)	51
その他	53
平均	45

表 3.20 N_4' におけるパターンの一致率

パターン	一致率 (%)
1 (気にする)	39
2 (私 的)	29
3 (公 的)	15
4 (気にしない)	41
その他	17
平均	33

表 3.21 R^2 におけるパターンの一致率

パターン	一致率 (%)
旧 1	42
↑ 2	42
↓ 3	43
新 4	32
その他	50
平均	41

これらの表を通していえることは、いくつかの回答をクロスしてできた組の一致率が常時低くなるという傾向について例外とはなり得ず、ここにおいてもパターンの安定度は高いとはいえないであろう。したがって、この調査でつくられた各種のパターンが、くりかえされる調査において常に固定的ではあるとみなされることは危険である。この辺に、かかるパターン分析の一定の限界の露呈が示されたわけであるが、この問題を克服するためには、われわれのモデル設定について態度構造をローカルにとりあつかうことや確率モデルの導入など、さらなる緻密化が要求されることになる。

§4 主要質問の分析

4.1 問 8「先生の悪事」について

まずもっとも問題のありそうな主要質問、問 8 から観てゆくことにしよう。

[1] 教育関係質問群からみた場合

問 8 a) にもられた「善意のウソ」が「子供の教育上の配慮」からどのように考えられているか、すなわち質問主旨が生かされているかどうかを観るためには、直接的には副質問群 C_1 , C_2 との相関を調べてみることであろう。

問 8 a) および問 8 におけるパターンと質問群 C_1 とのクロス集計は次ぎのとおりである。

表 4.1 問 8 a) \times c_1 (黄) (表 2.8; 3.13 参照)

問 8 a)		1 そんなことは はない	2 ほんとうだ	3 その他	4 D.K.	計
C_1 パターン						
教育への 関心度 (低 ↓ 高)	1	41	52	5	2	100 (%)
	2	50	35	15	0	100 (%)
	3	47	43	8	2	100 (%)
	4	51	35	36	0	100 (%)
y, w						
計		47	46	12	1	100 (%)

表 4.2 問 8 パターン × C_1 (黄) (表 2.9; 3.8 参照)

問 8 パターン C_1 パターン		1	2~5	6~10	11	x	y	計
教育への 関心度 (低 ↓ 高)	1	27	25	30	11	5	2	100 (%)
	2	24	11	24	26	13	2	100 (%)
	3	24	17	17	30	8	4	100 (%)
	4	21	14	12	39	14	0	100 (%)
y, w								
計		24	16	20	28	10	2	100 (%)

まず表 4.1 についてみよう。 C_1 パターンでは、1~4 の順位で教育への関心度が高くなるように分類されていた。 C_1 のパターン“1”と“4”とを比較すると、“4”つまり教育の関心度が高いパターンの方が、問 8 a) の選択肢「1. そんなことはない」を選ぶ傾向にあるように見受けられる。しかし、これも中間のパターン 2, 3 を併せみると、その傾向が比例しているとはいえず、はっきりしないものとなっている。

ところが表 4.2 の方では、この傾向が明確に観察される。問 8 パターンの“1”は「2. それはほんとうだ」をバイアス質問に対しても変更することなく固持した部類、“パターン 11”は同じく「1. そんなことはない」を固持した部類であり、“2~5”、“6~11”は動揺したものである。教育の関心度が高いパターンになる程、問 8 パターンの“11”に集中し、パターン“1”が少くなる傾向にある。また動揺した部分“2~5”、“6~10”では教育の関心度が高い程少くなる傾向にある。

以上まとめると、主要質問、問 8 a) そのものでは、教育の関心度について高低の極端な対象に対し差異のある反応を示す傾向が見られるが中間的な部分では明確でなくなる。副質問 b), c) を追加すれば、その補充がなされ得るであろうということが推察される。

次に、問 8 a) および問 8 におけるパターンと質問群 C_2 とのクロス集計では次表のようになる。

表 4.3 問 8 a) × C_2 (黄) (表 2.8; 3.15 参照)

問 8 a) C_2		1 そんなことはない	2 ほんとうだ	3 その他	4 D.K.	計
「先生はすべての点ですぐれた立派な人物だ」	1 小・中ともに	55	35	9	1	100 (%)
	2 小学生のみ	52	36	12	0	100 (%)
	3 ともにそう考えない	25	60	13	2	100 (%)
	x	53	41	6	0	100 (%)
	y	37	50	13	0	100 (%)
	計	47	41	11	1	100 (%)

表 4.3 では、 C_2 パターンにおいて「先生はすべての点ですぐれた立派な人物だ」と思わせおくことに對し、小学生、中学生ともに「そうは考えない」というパターンは「そう考える」というパターンに比較して、問 8 a) の「2. ほんとうだ」を選択する率が増加し、それも C_2 パターン 1, 2, 3 の順に比例していることがわかる。これはまた表 4.4 においても、同様の傾向が見られることがわかる。

C_1, C_2 の両質問群の効果を比較すると、 C_2 の方が相関は高いわけで、このことは問 8 a) 「先生の悪事」が「教育の関心度」よりも「『先生はすべての点ですぐれた立派な人物だ』と思わせ

表 4.4 問 8 パターン × C₂(黄) (表 2.9; 3.15 参照)

問 8 パターン C ₂		1	2～5	6～10	11	x	y	計
「先生はすべての点で すぐれた立派な人物だ」	1 小・中 とも	21	14	19	36	8	2	100 (%)
	2 小学生 のみ	17	20	27	33	13	0	100 (%)
	3 小・中 ともに そう 考へない	42	15	22	10	10	0	100 (%)
	x	17	24	24	29	6	0	100 (%)
	y	25	25	25	13	11	0	100 (%)
計		24	17	21	28	9	1	100 (%)

ておく」ことの賛否の反応の方が強い相関をもつということを意味する。換言すれば問 8 a) の回答は、前者「子供の教育上の配慮」というよりはむしろ後者の発想からなされることが多いということも考えられるわけである。

[2] ノルム質問群、リファレンス質問群からみた場合

ノルム質問群とのクロス集計に関しては、各パターンの分布はほとんど同様で有意差がある²⁾とは考えられなかった。リファレンス質問群については次表のようになった。

表 4.5 問 8 a) × R(黄) (表 2.8; 3.10' 参照)

問 8 a) R	1 そんなこと はない	2 ほん とだ	3 その他	4 D.K.	空 欄	計
強	48	39	12	1		100 (%)
弱	50	43	7	0		100 (%)
その他	36	39	19	3	3	100 (%)
計	47	41	10	1	1	100 (%)

表 4.6 問 8 パターン × R(黄) (表 2.9; 3.10' 参照)

問 8 パターン R	1	2～5	6～10	11	x	y	計
強	25	13	27	21	11	3	100 (%)
弱	22	20	17	34	6	1	100 (%)
その他	26	13	13	23	19	6	100 (%)
計	24	16	20	28	9	3	100 (%)

これからわかるように、主要質問、問 8 a) そのものについては、R パターン強、弱についてその分布に有意差があると考えられないし、問 8 に副質問をつけて分類した問 8 パターンでは、有意差が認められるが、しかしその意味するものが何であるかは系統的に推論することはできない。

以上によって、主要質問、問 8 a) はノルム質問群、リファレンス質問群にいつて、各パターンの分布に差異が生じたとは考えられない。このことは、また問 8 a) がこれらの質問群にとりあげられたような社会規範に対する意識の度合ないし帰属意識の強度からそれらへの影響を観ることができないということを意味している。

[3] テクニカル質問群からみた場合

まず T₁ のパターンとの関係をみよう。この場合、黄調査票に関するものでは表 3.2 における典型的な反応を示すパターン t と中間的部分 m との間に位置するものとして、パタ

ーン tm を作った。クロス集計の結果は下記の通りである。

表 4.7 問 8 a) $\times T_1$ (黄) (表 2.8; 3.2 参照)

問 8 a) T_1	1 そんなことは ない	2 ほんとうだ	3 その他	4 D.K.	空欄	計
t	50	35	11	4		100 (%)
tm	55	38	6	1		100 (%)
m	40	49	11	0		100 (%)
x	31	47	22	0		100 (%)
y	72	0	14	0	14	100 (%)
計	47	41	11	0		100 (%)

表 4.8 問 8 パターン $\times T_1$ (黄) (表 2.9; 3.2 参照)

問 8 パターン T_1	1	2 ~ 5	6 ~ 10	11	x	y	計
t	21	14	14	36	11	4	100 (%)
tm	25	10	20	36	5	4	100 (%)
m	22	27	22	19	10	0	100 (%)
x	31	18	18	12	21	0	100 (%)
y	0	0	17	50	17	16	100 (%)
計	24	16	20	27	10	3	100 (%)

表 4.7, 表 4.8 共に, ステレオタイプ的な反応を示すパターン t と T_1 質問群に抵抗を示したパターン x とはその分布が対蹠的な形をなしていることがわかる。すなわち, パターン t および tm では「そんなことはない」に, パターン x では「ほんとうだ」に集中する傾向がある。中間的分 m では, 両者が一様化されているし, また表 4.8 に見られるように, バイアス質問につられて回答の変動がある。またパターン x は, 問 8 においても「その他」の回答をする傾向が大きいといえよう。

以上の結果から推定されることは, §2 で分析したように問 8 a) の質問文内容に情況設定が不足していて, 調査対象は質問が要求する一定の方向にいきおい反応するということであろう。

次ぎに質問群 T_2 とのクロス集計をみよう。

表 4.9 問 8 a) $\times T_2$ (黄) (表 2.8; 3.3 参照)

問 8 a) T_2	1 そんなことは ない	2 ほんとうだ	3 その他	4 D.K.	空欄	計
b (偏りを示す傾向)	48	41	8	3		100 (%)
m (中 間)	47	41	12	0		100 (%)
r (連続する傾向)	48	40	8	2	2	100 (%)
計	47	41	11	1	1	100 (%)

表 4.10 問 8 パターン $\times T_2$ (黄) (表 2.9; 3.3 参照)

問 8 パターン T_2	1	2 ~ 10	11	x	y	計
b (偏りを示す傾向)	26	33	31	5	5	100 (%)
m (中 間)	23	40	25	12	0	100 (%)
r (連続する傾向)	25	28	36	8	3	100 (%)
計	24	36	28	10	2	100 (%)

表 4.9 からは主要質問、問 8a) そのものでは各パターンの分布は殆んど同様であって、何ら考慮の余地はない。しかるに表 4.10 では、明確な相違を示している。すなわち、 T_2 質問群のパターン m (中間的部分) では、バイアス質問に回答の変動をみせた、問 8 パターンの 2~10 に集中する傾向を示し、特定の回答に偏りを示すパターン b と同種の回答を続ける傾向のパターン r とでは、問 8 パターンで 1 もしくは 11、つまり回答に変動を示さない傾向を示す。

このことは、このような副質問群を追加してゆく場合に留意しなければならない問題であろう。

4.2 問 7「恩人がキトクるとき」について

[1] ノルム関係質問群からみた場合。

まず質問群 N_1 とのクロス集計の結果をみよう。

表 4.11 問 7 a) $\times N_1$ (白) (表 2.3; 3.5 参照)

問 7 a) N_1	1 故郷へ 帰る	2 会議に 出席する	3 その他	4 D.K.	計
1 (強)	23	77	0	0	100 (%)
2 (中)	24	76	0	0	100 (%)
3,4 (弱)	26	65	9	0	100 (%)
z	35	62	3	0	100 (%)
その他	35	65	0	0	100 (%)
計	28	70	2	0	100 (%)

表 4.12 問 7 パターン $\times N_1$ (白) (表 2.3; 3.5 参照)

問 8 パターン N_1	1,2,3	4,5	6,7	8,9,10	x	y	計
1 (強)	11	9	32	37	11	0	100 (%)
2 (中)	16	8	16	56	0	4	100 (%)
3,4 (弱)	9	17	22	43	9	0	100 (%)
z	19	16	35	27	3	0	100 (%)
その他	22	9	9	52	4	4	100 (%)
計	15	11	24	42	6	2	100 (%)

表 4.11 においてみられるように、主要質問、問 7a) の N_1 の質問群とのクロス集計では、各パターンの分布は明確ではないが、若干の相違を示す傾向にある。 N_1 で「社会規範」に「強度」の傾向を示すパターン 1 では相対的に「2. 会議に出席する」が、「弱度」のパターン 3, 4 では「故郷へ帰る」が増加する傾向にあるといえよう。表 4.12 の問 7 パターンでは特徴は観られない。

問 7 の内容は二つの選択肢がともに社会規範にかかわることがらであり、一方が私的なものに重みをおき、他方が公的なものに重みをおくといった「競合」の形態をとっている。したがって、社会規範への強度からは両者に対する分布の区別が出てくるというより、上述の意味での性質に関係してくると思われる。実際 N_1 でとられた社会規範は大体的なものの性格をもっていて、そのためにその「強度」の強いものが若干「2. 会議に出席する」に寄るという傾向を示したと推定される。

この推論を確かめるには、社会規範の公的なものとの関心の違いをみる N_4 ないし N_4' 質問群とのクロス集計を調べるとよい。

表 4.13 問 7 a) \times N_4 (白) (表 2.3 ; 3.7 参照)

問 7 a) N_4	1 故郷へ 帰る	2 会議に 出席する	3 その他	4 D.K.	計
1 (気にする)	29	71	0	0	100 (%)
2 (迷信型)	42	58	0	0	100 (%)
3 (社会慣習型)	27	74	1	3	100 (%)
4 (気にしない)	26	72	1	1	100 (%)
その他	32	57	7	4	100 (%)
計	27	69	2	2	100 (%)

表 4.14 問 7 a) \times N_4' (白) (表 2.3 ; 3.7 参照)

問 7 a) N_4'	1 故郷へ 帰る	2 会議に 出席する	3 その他	4 D.K.	計
1 (気にする)	32	68	0	0	100 (%)
2 (私 的)	29	68	3	0	100 (%)
3 (公 的)	22	78	0	0	100 (%)
4 (気にしない)	30	68	1	1	100 (%)
その他	13	65	9	13	100 (%)
計	27	69	2	2	100 (%)

上表の結果から、 N_4 , N_4' ともに「気にする」としたパターン 1 と「気にしない」としたパターン 4 との分布には差異がみられないが、 N_4 における「迷信にこだわる」パターン 2 と「社会慣習を気にする」パターン 3 とは明確な区別が出ているし、 N_4' についても「私的なものを気にする」パターン 3 と「公的なものを気にする」パターン 4 とは明確な相違が出ている。このことは前述の推論を裏書きするものといえよう。

[2] リファレンス質問群からみた場合

次に、リファレンス質問群とのクロス集計について考えよう。質問群 R_2' とのクロス集計の結果は次表のとおりである。

表 4.15 問 7 a) \times R_2' (白) (表 2.3 ; 3.11 参照)

問 7 a) R_2'		1 故郷へ 帰る	2 会議に 出席する	3 その他	4 D.K.	計
旧 \updownarrow 新	1	33	63	5	0	100 (%)
	2	31	67	1	1	100 (%)
	3	25	73	0	2	100 (%)
	4	21	73	3	3	100 (%)
その他		16	74	5	5	100 (%)
計		26	70	2	2	100 (%)

此処においても、ノルム質問群に関する分析にみた場合と同様な結果をみることができる。すなわち、いわゆる古い型のものは、選択肢「1. 故郷へ帰る」を、新しい型のものは選択肢「2. 会議に出席する」を選択する傾向が相対的に増加するということ、しかもその移行は漸進的であるが比例的であることがみられる。

したがって主要質問、問 7 a) の質問の主旨は、こゝにおいても生かされていることが測られたということができよう。

[3] テクニカル質問群からみた場合

次に質問群と T_1 のクロス集計について考えよう。結果は次表のとおりである。

表 4.16 問 7 a) × T₁(白) (表 2.3; 3.2 参照)

問 7 a) T ₁	1 故郷へ 帰る	2 会議に 出席する	3 その他	4 D.K.	計
t (典型的)	26	74	0	0	100 (%)
m (中 間)	28	70	1	1	100 (%)
x (抵抗を 示す)	19	70	8	3	100 (%)
y (D.K.)	68	12	0	12	100 (%)
計	27	69	2	2	100 (%)

表 4.17 問 パターン × T₁(白) (表 2.9; 3.2 参照)

問 7 パターン T ₁	1,2,3	4,5	6,7	8,9,10	その他	D.K.	計
t (典型的)	13	13	28	44	0	2	100 (%)
m (中 間)	20	7	27	40	4	2	100 (%)
x (抵抗を 示す)	8	13	19	38	19	3	100 (%)
y (D.K.)	33	17	0	17	0	33	100 (%)
計	16	11	25	40	5	3	100 (%)

表 4.15 からわかるように、質問群 T₁ に関しては、パターン分類で D.K. であったもの以外では、各パターン分布に差異はみられない。抵抗を示したパターン x では若干の区別が出てきているようであるが、目立つほどのものではない。表 4.16 の問 7 パターンについても同様な結果である。

このことは、問 8 a) と比較して考えると、問 7 a) は質問文に情況設定のための外的条件が具体的にあらわされているために、テクニカル質問群に対し目立つような各パターンの分布の差異を生じなかったのではないかと推論されることを示しているものであろう。

4.3 問 6「めんどろをみる課長」について

[1] リファレンス質問群からみた場合

まず質問群 R₂ について、主要質問、問 6 a) の白調査票と黄調査票との分析結果を対比することにして。

表 4.18 問 6 a) × R₂(白) (表 2.1; 3.9 参照)

問 6 a) R ₂	1 甲課長	2 乙課長	3 その他	4 D.K.	計
1,2 (旧 い 型)	15	85	0	0	100 (%)
3 (中 間)	8	91	1	0	100 (%)
4,5 (新しい型)	21	76	3	0	100 (%)
その他	0	78	0	22	100 (%)
計	13	85	1	1	100 (%)

表 4.19 問 6 a) × R₂(黄) (表 2.2; 3.9 参照)

問 6 a) R ₂	1 甲課長	2 乙課長	3 その他	4 D.K.	空 欄	計
1,2 (旧 い 型)	31	66	0	0	3	100 (%)
3 (中 間)	44	53	2	1		100 (%)
4,5 (新しい型)	49	49	1	1		100 (%)
その他	25	42	8	8	17	100 (%)
計	42	52	2	2	2	100 (%)

表 4.17, 質問群 R_2 のパターンにおいて, 職場あるいはそれへの勤務状態に対する考え方として, 古い伝統的なものにこだわるパターン 1, 2 では相対的に「2. 乙課長」を選択するのが増加するのが増加する傾向にあり, 新しい近代的な考え方をするパターン 4, 5 では「1. 甲課長」を選択するのが増加する傾向にある. 表 4.18 では同じ質問群 R_2 を黄調査票についての問 6a) に適用したものである. 黄調査票では §2 で述べておいたように, 質問リストの文章の前半と後半とを入れかえたのであるが, このとき両課長へのイメージが変わって甲課長が乙課長よりよい印象を受けるという比率が高くなっている. さて, 表 4.18 においても, 表 4.17 と同様な傾向を示しているわけであるが, パターンの分布の間の差異がより比例的になっていることであろう.

このようにして問 6a) では, 調査対象に質問文によって両課長のイメージ・アップをさせるとい形式, したがって 調査対象に対してそこに如何なるものが考えられるかということとはそれ自身の検証が必要であるわけだが, (§2 参照), 問 6a) の質問そのものにおいては白, 黄調査等の何れにおいても帰属意識に関係するような事態があらわれているという限りにおいて, 質問の主旨それ自体はかゝる意味においては成功しているといえよう.

なお質問群 R_2' においても上述の分析と同様な結果を得た. 特に黄調査票では, パターン 4 において「1. 甲課長」と「2. 乙課長」との選択比が逆転しており, 興味あることと思われる. 次の表 4.19, 表 4.20 に示しておく.

表 4.20 問 6a) $\times R_2'$ (白) (表 2.1; 3.11 参照)

問 6a)		1 甲課長	2 乙課長	3 その他	4 D.K.	計
R_2'	旧	4	96	0	0	100 (%)
	↑	10	90	0	0	100 (%)
	↓	21	78	3	0	100 (%)
	新	24	76	0	0	100 (%)
その他		10	74	6	10	100 (%)
計		13	85	1	1	100 (%)

表 4.21 問 6a) $\times R_2'$ (黄) (表 2.2; 3.11 参照)

問 6a)		1 甲課長	2 乙課長	3 その他	4 D.K.	空欄	計
R_2'	旧	17	79	4	0		100 (%)
	↑	41	57	0	1	1	100 (%)
	↓	47	49	2	2		100 (%)
	新	66	31	3	0		100 (%)
その他		38	49	3	3	7	100 (%)
計		42	52	2	2	2	100 (%)

[2] ノルム質問群からみた場合

ノルム質問群 N_1 とのクロス集計の結果は, リファレンス質問群における分析と同様な傾向を得た. 白および黄調査票における集計結果を次表において示しておく.

表 4.22 問 6 a) \times N_1 (白) (表 2.1; 3.5 参照)

問 6 a) N_1	1 甲課長	2 乙課長	3 その他	4 D.K.	計
1 (強)	9	91	0	0	100 (%)
1 (中)	8	92	0	0	100 (%)
3,4 (弱)	22	78	0	0	100 (%)
z	15	83	0	2	100 (%)
その他	15	75	7	3	100 (%)
計	13	85	1	1	100 (%)

表 4.23 問 6 a) \times N_1 (黄) (表 2.2; 3.5 参照)

問 6 a) N_1	1 甲課長	2 乙課長	3 その他	4 D.K.	空欄	計
1 (強)	43	57	0	0		100 (%)
2 (中)	33	65	1	0	1	100 (%)
3,4 (弱)	49	47	2	2		100 (%)
z	0	100	0	0		100 (%)
その他	44	39	4	4	9	100 (%)
計	43	53	2	1	1	100 (%)

[3] テクニカル質問群からみた場合

主要質問, 問 6 a) のテクニカル質問群 T_1 とのクロス集計の結果は, 白および黄調査票の各々について, 次のとおりである。

表 4.24 問 6 a) \times T_1 (白) (表 2.1; 3.2 参照)

問 6 a) T_1	1 甲課長	2 乙課長	3 その他	4 D.K.	計
t (典型的)	21	79	0	0	100 (%)
m (中 間)	9	91	0	0	100 (%)
x (抵抗を 示す)	7	86	7	0	100 (%)
その他	22	70	8	0	100 (%)
計	14	84	2	0	100 (%)

表 4.25 問 6 a) \times T_2 (黄) (表 2.2; 3.2 参照)

問 6 a) T_2	1 甲課長	2 乙課長	3 その他	4 D.K.	計
t (典型的)	50	50	0	0	100 (%)
tm (や、 典型的)	44	52	4	0	100 (%)
m (中 間)	46	54	0	0	100 (%)
x (抵抗を 示す)	33	59	8	0	100 (%)
その他	40	50	10	0	100 (%)
計	43	53	4	0	100 (%)

表 4.24 白調査票においては, 質問群 T_1 の各パターンの分布は若干の差異を示している。表 4.2 黄調査票の方ではこの差異が弱まり, いくらかの相違の傾向をみせるといったものである。

いずれにせよ、問 6a) は問 8a) と同様に、ステレオタイプの調査対象とそうでない対象との間に異った反応を生じさせ易いものであるといえる。このことは問 6a) が質問形式としては問 8a) とまったく異なるが、外的条件の設定の不明確さという点については同様な弱さをもっていることを意味していると考えられる。つまり、問 6a) では調査対象の各々が甲、乙二人の課長のイメージをリストの文より想定することによって反応を求める形式になっているのであるが、このような設定のもとでは、ステレオタイプなどテクニカル質問群で分けられるような調査対象の性格上の影響があらわれるという弱点をもつということが心配されるわけである。

§5. ま と め

以上の分析の諸結果を最後にまとめておくことにしよう。主要質問の各々が、各副質問群のパターン間にそれらの分布の相違をみせたかどうかを表にしてまとめてみると次のようになる。

表 5.1 主要質問に対する副質問群の各パターンの分布

副質問群 主要質問		教 育 関 係		ノルム	リファレンス	テクニカル
		関心度	「先生は立派な人物」			
問 6 a)	(白)	/		相違がある	明確に相違がある	相違がある
	(黄)			相違がある	明確に相違がある	や、相違がある
問 7 a)	(白)			相違がある	明確に相違がある	ほとんど相違がない
問 8 a)	(黄)	や、相違がある	明確に相違がある	相違なし	相違なし	明確に相違がある

これらの結果からいえることは、問 7a) (「恩人がキトクのとき」) は一応質問の主旨が生かされているが、問 8a) (「先生の悪事」) は明確でないということであろう。問 6a) (「めんどろをみる課長」) はそれなりには成功しているが、§2, §4 に述べたような意味で不安定であり、このような形式をとる場合、周到な注意を要するといえよう。

いずれの場合においても外的条件が明確に設定されているかということが、これらパターン分析の要石となっていたということであり、特にテクニカル質問群においてみられたようなステレオタイプの反応する調査対象や逆に批判的ないし抵抗を示すような調査対象との反応の間に明確な差異を生じたことが観察された。

方法論的な立場からみると、副質問群を設定し、それらの相互の組合せによってパターンを作成するとき、これらが調査対象の態度構造における部類と対応していることを前提として、主要質問のパターンとのクロス分析がそのまゝ部類における分布を示していると解釈されるということ、したがってそれらの分布の比較から主要質問の妥当性を検定するという方法によって実験したことになるであろう。

この立場からいえば、以上の諸結果は種々の粉らわしさから完全に免れているとはいえないが、初期の目的を一応は果たしたということができると考えられる。

しかしながら、§3 の終りに述べているように、パネル調査の一致率のチェックに対しては、作成されたパターンが安定しているとはいえない。こゝに、この調査でとられたパターン分析の限界があるとみることもできよう。この問題を克服するためには、モデル設定をさらに微密化する必要がある。態度構造を比較するための尺度の一次元化の問題とも関連して、ローカルな座標の導入や確率モデルの設定などがその克服の手段として予想される。

なお、これら 3 つの主要質問の共通している形式としていわゆる「競合規範」をとっている

ことであるが、これが調査の妥当性について如何なる意味をもつかということは、今回の分析においてなされなかったが、残された一つの大きな問題であろう。

最後に調査企画と実施に協力いただいた委員の方々、特に共同研究として任務を推進された当研究所鈴木達三、多賀保志両氏、ならびに分析企画やパターン分類作成に尽力された木下節子（旧姓内野）氏、資料整理と集計にお世話になった矢代文子氏に衷心から謝意を表します。

また、林部長に、終始アドバイスをいただき、論稿についても批評をいただいたことを感謝します。

統計数理研究所

文 献

- [1] 統計数理研究所国民性調査委員会：『日本人の国民性』，至誠堂，1961.
- [2] 態度の構造分析に関する統計的研究委員会：『数研リポート』，No. 22，1969.
- [3] 統計数理研究所国民性調査委員会：『第2・日本人の国民性』至誠堂，1970.